

# 明治初期におけるフレーベル教育思想の受容形態

浦田 まり子

## 序

フレーベルの教育思想がわが国に最初に受け入れられたのは、幼稚園教育においてである。国立の最初の幼稚園である東京女子高等師範学校の附属幼稚園は、明治九年に開園した。それ以前にも京都に幼稚園と言えるものがあつたことが知られている。国立幼稚園の創設にあたって、幼稚園教育の意義や必要についての文章が「教育雑誌」にもしばしば書かれた。明治九年には既に、「幼稚園」や「幼稚園記」と題する文献が翻訳され出版され、それらにはフレーベルの恩物の紹介や、幼稚園教育の在り方、教育方法が説明されている。これらの訳本が、幼稚園創設の年に出されていることに、幼稚園教育に対するわが国政府の意気込みを知ることができる。

しかし一般の人々はフレーベルの教育思想についてはどのように受けとめていたのであろうか。幼稚園をとおしてフレーベルの教育思想をどのように理解していたのであろうか。

本稿は、明治初期の幼稚園教育のなかで受け入れられ始めたフレーベルの教育思想が、どのような受容過程を辿ったかをみていこうとするものである。

文献は日本人によって書かれたもののみを対象とし、明治初年から明治二十年までに出版されたものに限った。それは訳本の内容そのものは、そのまま日本人の理解と考えることはできないこと、フレーベル思想の受容の最初の時点に的を絞らなかったこと、並びに、明治二十年にはジョセフ・ペーン著、山根悌三郎訳「フレーベル氏小伝及幼稚園」というフレーベル思想について解説がなされた文献がはじめて訳出され出版されたことによるのである。また同書は、その後のフレーベル思想理解に影響を与えたと予想されるからである。

そこで本稿は、次の文献を資料とした。

関信三著「幼稚園創立法」 明治十一年、文部省、教育雑誌第八十四号

関信三纂輯「幼稚園法二十遊嬉」 明治十二年、青山堂

日柳喬著「幼稚園案内」 明治十七年、浪華文会

飯島半十郎著「幼稚園初歩」 明治十八年、青海堂

林吾一著「幼稚保育篇」 明治二十年、金港堂

ところで、先にも述べたように、フレーベルの教育思想に関しては、幼稚園の実践のなかで受容されたのであるから、幼稚園教育に関する解釈の内容をみることを手掛りとして、フレーベル教育思想の受容について調べることにした。すなわち幼稚園教育の実践内容においてではなく、文献に示された幼稚園教育理解のなかに、フレーベル教育思想の理解の様子をみようとしたのである。そのため、先ず幼稚園の目的または効用についての理解、次にその幼稚園教育の内容についての理解に視点を置いた。資料文献は実践上の問題に関する論述が主であるため、フレーベルの教育思想の、どの点がどのように解されているかという見方は困難であるため、まず「幼稚園創立法」に述べられていることを基準にし、同書以後に出版された他の文献を比較する形式で検討し更にそれらはフレーベルの主著「人間の

教育」(Menschenziehung, 1826) に述べられていることのどの事柄に当るか調べてみた。ここで用いた文献が取り扱う内容がほぼ同一であるためこのような作業方法を採用した。

なお本稿では便宜上各文献をそれぞれ「創立法」「二十遊嬉」「案内」「初歩」及び「保育篇」と仮称した。「人間の教育」は荒井武訳岩波文庫版(上下)を用いた。

## 一、幼稚園の目的・効用について

「創立法」で述べられていることの大半は、米国や英国で出版された図書を参考として、それらの内容の紹介となっている。ただしその出典は明らかにされていない。

先ず幼稚園の名の由来から、目的へと説明がされている。

老練園丁の草木ヲ培養スル如ク其曲ルハ之ヲ直クシ其足ラザルハ之ヲ補ヒ邪欲ヲ制シ眩惑ヲ驅リ以テ幼稚天賦ノ本性ヲ養成スル適切ノ良法ナカル可カラズ是レ幼稚園ノ發明アル原由ナリ

今其功用ヲ詳カニスルニ西人ノ説二十五条アリ即チ左ニ揭示ス

第一条 身体健康ニシテ手業熟練シ且ツ意匠鋭敏ナリ加之事ヲ作スニ順序アリテ且ツ精密丁寧ナリ

第二条 挙動温雅ニシテ窮屈ナラズ且ツ言語ニ自ラ勢力アルヲ以テ普通学校ノ優等予科ト為サシム可シ

第三条 注意開悟及ビ理論ノ勢力ヲ發揮ス

第四条 發揮ヲ齊一ニシテ心性ヲ伶俐ニシ身体ヲ強健ニス

第五条 秀絶ナリ即チ心性ノ作用ニ於テ益々聡明ニシテ且ツ益々敏捷ナリ

第六条 身意ノ發達齊一ナルヲ以テ将来何類ノ産業ニ従事スルモ自ラ力量アリ

第七條 身意齊ク其益ヲ占メ感官ヲ練習シ才力ヲ増進ス

第八條 思想力ヲ練磨シ且ツ覺悟心ヲ明亮ニス

第九條 身意ヲ發達シテ注目力ヲ敏捷ニス

第十條 進歩ノ快疾ナルコト常度ニ超過スト雖毫モ稚心ヲ急驅セズ

第十一條 百事ニ當テ精巧確實ニシテ且ツ伶俐ナリ

第十二條 幼稚園ハ將來普通學校ニ入ルノ最上予備門ナリ

第十三條 注目注意及ビ改良心ヲ練習ス

第十四條 注意ト從順トニ慣習シ且ツ勉強力ヲ増進ス

第十五條 幼稚園ノ稚兒ハ礼讓アリテ容儀溫雅ナリ且ツ謹慎銳敏ニシテ能ク誨フベシ加之博ク各物ヲ識ランコ

トヲ要スルニ銳意ナリ（五頁〜七頁）

このほか次の説を挙げてゐる。

日耳曼國ノ教育者某ノ説ク所三条アリ其一ニ曰ク幼稚園ハ稚兒ヲシテ社会惡習ノ伝染ヲ避ケシム可シ蓋シ稚兒稍々成長シ僅ニ事物ヲ解スルノ時ニ方リ未ダ善惡ヲ區別スル能ハズ此時ニ際シ無文不学ナル乳母伝婢ノ手ニ成長セシムルトキハ自ラ社会ノ惡習ニ陥リ道德ヲ損スルノ害尠カラズ然レトモ幼稚園ニ於テハ学力アリテ且ツ老実ナル幼稚園師アリ真正ノ方法ニ依テ幼稚ヲ保育スルヲ以テ自ラ社会ノ惡習ヲ拒絶スルコトヲ得ベシ

其二ニ曰ク幼稚園ハ幼稚ヲシテ物品ヲ製造スルノ能力ヲ増サシムベシ凡ソ玩器ヲ毀チ之ヲ製造スルノ法ヲ知ラント欲スルハ稚情ノ常ナリ故ニ幼稚園ニ於テハ其稚情ニ適合スル百般ノ玩器ヲ備ヘ以テ之ヲ玩弄シ且ツ之ヲ玩觀セシム之ニ依テ幼稚ノ物品ヲ製造スル智力ヨ増成スルコト亦尠シトセズ

其三ニ曰ク幼稚園ハ婦女ヲシテ稚児ヲ教養スルノ法ヲ知ラシムベシ夫レ女子長ジテ人ノ妻ト為リ母ト為ルハ其常務ナリ然レトモ其子女ニ於ル之ヲ教養スルノ法ヲ知ル者幾下希ナリ然リ而ノ幼稚園ノ法制ハ自ラ一般女子ノ幼稚ヲ保育スル真正ノ模範ト為スベシ（七頁〜八頁）

以上同書においては幼稚園は人間の成長にとって重要であることの解説がなされているのであるが、その内容とするところを次の三つにまとめて論をすすめていくことにする。

まず第一に幼稚園は、幼稚園教育修了後行なわれる学校教育のための最上の予備教育であるということ。

第二に幼稚園は生産活動ということに注目しながらも、ある一定の職業（例えば大工・左官など）のための教育ではなく、幼児の身心の調和的発達を目指していること。

第三に幼稚園の教育内容は、家庭における教育と重複しまたはそれを補足するものであること。

次にこれら三つの点について、他の文献を検討し、幼稚園の目的に関する理解をみていくことにする。

#### （１） 幼稚園は、学校教育のための最上の予備教育であることについて

「二十遊嬉」においては、学校教育の予備教育としての幼稚園教育ということは述べられていない。本書は「創立法」と同一の著者によるものであるが、むしろ教育対象の成長段階の別ということから、学校教育とは別の種類の教育であることをいおうとしている。

凡ソ男女初生ヨリ二十三歳ニ達スルノ間ヲ教育年令トス。是レ男女ノ心智発達スル動勢ノ進行シテ已マザルハ、唯此年令ノ圈内ニ在ルベキヲ以テナリ。就中三四歳乃至六七歳ノ間ヲ稚児ノ期トシ、五官漸ク感覚ノ作用アリ、心思亦識別ノ能力ナキニアラズ。然レドモ其精神タル未ダ薄劣微弱ニシテ、其作用ヲ固定シ其能力ヲ維持ス

ルヲ得ズ。布列別氏ノ所謂ル稚児トハ蓋シコノ年令ノ男女ニシテ、終身ノ針路未ダ其方向ヲ定メザルモノヲ云ナリ。(二丁〜三丁)

学童已上ノ教育ノ如キハ、幼稚ノ教育に比スルニ、無形中ノ有形ト云モ敢テ誣言ニ非ルベシ。既ニ六七歳ナル学童ノ学校ニ在テ学事ニ従フ者、一日之ヲ選バ自ラ一日ノ功ヲ奏シ、十日之ヲ勉レバ亦十日ノ益ヲ現セザルハナシ。然ト雖ドモ幼稚ノ教育ニ至テハ、唯冥々ノ中ニ其益ヲ得ルモノニシテ、其得否ヲ認可スルコト最モ難シ。故ニ之ヲ学童ノ教育ニ比スレバ、無形中ノ無形ト云モ可ナリ(三丁)

「案内」の中にも学校教育の予備教育という語は用いられていない。またこのことについての見解が明確に述べられてはいないが、これに関連することに触れている所が一箇所ある。

仮令今日之(注 幼児のこを)を園に送らさるも佗日必らず学校に送らさるへからす然れは寧ろ始めに之を教へ以て前途の予備をなすに如かす(五三丁)

また幼稚園教育は学校教育とは種類を別にするものであるということが言われている。

幼稚園は学校に非ず(中略)幼稚園は規則を有せる一の遊戯場なり(三丁)

「初歩」においても同様であつて、すなわち同書の『保母の注意』と題する項に次のことが述べられている。

かの小学教則(注 明治五年九月発令同六年五月改正)の如く、何時間は何科と厳に規則を設くること宜しからず、さりとて屢業を換ふるも亦宜しからず只遊戯業中知らず知らず時間を消し昏暮に至るを忘れしむるを要すべし(巻一 七丁)

「保育篇」にも学校教育の予備教育ということは述べられてはおらず、むしろ幼稚園の時期は幼児にとって学校教育とは別の方法をもつ教育時期であるとして区別している。ただし教育内容は各時期で隔りがあつてはならないとし

ている。

中学校ノ方法ハ以テ小学校ニ施スヘカラス小学校ノ方法ハ以テ幼稚園ニ用フヘカラス苟モ其順序ヲ誤リ小学校ノ方法ヲ以テ幼稚園ニ用ヒン乎則チ幼稚ノ天性ニ悖リ其發育ヲ害シ寧ロ教育ヲ施ササルノ勝レルニ如カサラントス

(序 三頁、四頁)

念フニ「フレイベル」氏ハ教育ノ順序ニ著シキ懸隔アルヲ欲セサルカ如シ即チ家庭ノ上ニ幼稚園ヲ設ケ其連絡ヲ密ニシ又幼稚園ハ更ニ嚴正ナル小学校ト接続セシメ(後略)(十四頁)

(2) 幼稚園は、生産活動を注視するが職業につくための教育ではなく、幼児の身心の調和的発達を目標とすることについて

「二十遊嬉」においては「創立法」と同様に、幼児を園内の草木にたとえ、その生来の本性を育てることが幼稚園教育の目的であると述べている。

園丁ノ老練スルモノハ、善ク草木ノ性質ヲ察知シ、而シテ適切ノ方法ニ依テ之ヲ培養スルヲ以テ、曾テ其天稟ノ本性ヲ害セズ。百種ノ草木ヲシテ皆能ク開花結実ノ美榮ヲ呈セシム。既ニ此ノ如ク園丁ノ草木ヲ培養スル尚ホ其質ニ戻リ其時ヲ誤ルベカラズ。治ヤ人生ノ教育ニ於テオヤ。(二丁)

「案内」も幼稚園の名の由来に基づいて幼稚園教育の目的を説明している。

稚児は猶一個植物の初生と同等して支体意識の軟弱薄脆なる之を養て喬木良材となする如く(中略)能く草木の性質を察し適當の法を以て之を培養し花を開き実を結ばしむ(中略)是乃ち初歩教育の好譬喩にして幼稚を養ふこと又応に此の如くなるべし(二丁、三丁)

また幼稚園の教育目的は幼児の本性から導かれるという。幼稚園教育の対象である幼児の本性をとらえ、それを養うことであるという。

児童の性は孤寂を嫌ひ群遊を好む是其本質にして起立行歩応接發言を屢するは己に体力を養ひ交際を好むの端なり是幼稚園のある所以にして彼危害を防ぎ健康を助け孤寂を破り交際を開かしめ其本性を養ふの方法を編成せり

### (三丁)

「初歩」においては、幼稚園教育の中心をなす遊戲の価値に触れ、幼児の成長における必要を述べている。

人皆我子の才智、他の群兒に秀出せんことを欲し、其の子猶幼稚なるに、自由の遊戲を禁し、嚴則の教育に従事せしめんとす、これ却て天稟の良能を妨げ、教育の道に背くものなり、何そ其の謬れるの甚しきや、抑幼稚の遊戲は、自然の工芸にして、教育は即此の自然の工芸を拡充するに過ぎざるなり、されば遊戲に就きて保育をなし、保育に就きて遊戲をなさしむるこそ、幼稚教育の要領なれ(卷一 三丁)

また同書も園の中の草木に幼児をなぞらえてその自然本性を成長させるべきであると述べている。

幼稚を保育するは、恰園中の草木を培養するが如くなる(中略)かの園丁の草木を育養するや、先ツ苗畦を治め、種子を播き、其の發生の後に至り蔓草を刈り、虫害を除き、風雨霜雪の患を防ぎ、朝暮愛護して天然の性を養ひ、其の一斉に生長するに及びて、これを他に移し終に向榮欣々として花を發し、菓を結ぶに至るなり、もし夫れ然らずして發生の後に生長せしめんことを欲し、或は過量の肥料を施し、或は抜きてこれを他に移すか如きは、却て生長を妨くるのみならず、遂に枯死せしむること往々これあるなり、幼稚を保育する亦此の如し(卷一 三丁、四丁)

群集せしめて保育すれば、幼稚相競ひて自然天稟の才能を發達するものなり世人或は一愛兒の為に、一教師を



聘し、幼稚の教育を急進せしめんとする者あり、大なる謬なり、此の如くして教育せし幼稚は、恰盆栽の樹の如く、遂に天然の美花を發すること能はず、天然の美果を結ふ事能はざるなり（卷一 五丁）

「保育篇」では先の「案内」「初步」より進展し、フレイベル思想の評価をも含んだ説明がなされている。

「フレイベル」氏ノ主張セル智性教育ノ方法ハ先輩唱フル所ト其類ヲ異ニセルニアラサレトモ種々方法ヲ変シテ之ヲ適用シ各自互ニ聯絡ヲ通シ又德育体育モ之ト合体一致セシメ先輩ノ曾テ知ラサル調和ト部分トニ注意スルニアリ（三頁）

また、同書の著者は幼稚園教育が調和的發達を目指すものであることについては、フレイベルのいうところに従つて理解している。

氏（注 フレイベル）平等ニ諸能力ヲ發育シテ一モ遺ス所ナキヲ以テ教育上の本分トスヘシ即チ平等ニ發育シテ有用神妙完全ナル生ヲ営ムニ適當シタル人物ヲ造ルヲ以テ目的トナスヘシト云ヘリ（四頁）

幼稚園ハ其目的ニ達セントスル一ノ方法ナルコトト其方法ハ常ニ目的ヲ標準トナスニアラサレハ他ノ幼稚ヲ正確ニ導クヘキ方法ニ比シ敢テ優劣ナキカ如キコトトノ二件ヲ記臆スルヲ頗ル重要ナリトス「フレイベル」氏云ハク此機關ノ目的ハ完全有用至善ナル人ヲ調和發達スルニアリト（一五二頁―一五三頁）

作業生産活動に触れては次のことが述べられている。

終始幼稚園ノ科ヲ通シテ諸種ノ手業遊嬉ハ身体及ヒ智性徳性ヲ練磨スヘキヲ以テ目的トセリ（八頁）

（3）幼稚園教育は、家庭教育と重複しまたはそれを補足するものであることについて

「二十遊嬉」では、家庭教育と幼稚園教育との関連について、それらを直結はしていないが、幼児教育の重要性を

説いて、当時家庭で適切な教育が行なわれていない実情を指摘している。

幼稚ノ時教導其宜キヲ得レバ善且智、之ヲ誤レバ頑且愚タルヲ免レズ（一丁）

熟々世上ノ子女教育ノ現況ヲ觀察スルニ、唯六歳已上ノ学童ヲ教導スルノ緊要ナルヲ知テ、未ダ学令已下ノ幼稚ヲ教養スルノ最モ忽諸スベカラザルヲ知ルモノ幾ニト稀ナリ。故ニ世人ノ稚児ニ於ルヤ、大抵富人ハ不学無文ナル乳母伝婢ニ其保育ヲ托シ、又貧者ハ之ヲ街路上ニ放テ、頑童黠児ト群ヲ為サシメ、恬然トシテ其成長如何ヲ顧ミザルモノ比々皆是ナリ（三丁）

「案内」は、幼稚園の普及を図るため書かれたものであるので家庭教育と幼稚園教育との関連については平易な説明を加えている。

幼稚園は規則を有する一の遊嬉場にて家庭の間と雖も遊戲に規則あれば則ち是幼稚園なり（一丁）

幼稚園教育は幼児の本性を養うために、家庭教育での不正を補うものであると次のように述べている。

中人以上の家は之が遊戲の法則（注 前掲引用文中の「規則」のこと）あるも或は所謂孤寂の憂を免れず故に其幼児時に佗人を見て之に羞ぢ柔弱之が性となり長じて猶止まざる者あり又細民の家昼間職業の為夫妻共に外に出で或は妻は止まりて家に在るも其家事に掩はれ終に保育の法を失ひ又は之が為に業を怠る者多し皆是幼稚園の設けなかるべからざる所以にして之を保育に托し己れに代て養育するの便宜簡なるに如かず（三丁、四丁）

「初歩」もまた幼稚園の普及を目的として書かれたのであるが、幼稚園の実現が不可能なときは家庭を幼稚園にする方向を考え、両者の結びつきを図っている。

若夫れ幼稚園を設くること能はず、又保母を傭うこと能はず又家々相謀りて教場を置くこと能はざれば、慈母たる者宜しく此の書を読み、幼稚保育の大略を知り、幼稚を群遊せしめ、其の遊戲中より導きて教育を施を要すべ

し（巻一 六丁）

「保育篇」では専ら母親による家庭教育ないし保育のときと、それに加えて幼稚園が役割を果たすべきときとを區別すべきことを指摘している。

幼稚ノ猶全ク母ノ保護に依レルトキニ於テ已ニ始メサルヘカラス故ニ其間ハ未タ教師ノ關係スル所ニアラス（中略）三歳或ハ三歳前後ノ令ニ至レハ則チ更ニ一層広キ経験ノ余地ヲ要ス即チ他ノ幼稚ト社交ヲ求メ或ハ已ニ知レル所ヨリ一層広大ナル経験ノ世界ヲ要スルナリ（中略）其社交ト世界トヲ供スルモノ（中略）名ケテ幼稚園ト云フ（四頁）

これまでみてきたところでは、幼稚園の目的や効用についての各文献の言うところの間に大きな隔りはなかった。次に以上各文献からフレーベル思想理解と言える点について検討していくことにする。以上の各文献で幼児を園中の草木にたとえているが、このことはフレーベルが幼稚園（Kindergarten）と名付けた考えのもとになっている事柄であり、このような幼児教育観は、「人間の教育」の次の部分に示されている。

植物や動物とくに若い動植物に、われわれは空間と時間を与える。これは、そうすれば、それらのうちに働いている、それぞれの個体のうちに働いている法則に従って、美しく発育し、立派に生長することを、われわれが知っているからである（上、十九頁）

葡萄の樹のような植物も、なるほど剪定を受けなければならない。しかし、剪家そのものが、葡萄の樹に葡萄をもたらしわけではない。むしろ、園丁が、剪定にさいし、全く受動的に、注意深く、葡萄の樹の本性に従うのであれば、剪定によって、たとえそれが多分に善意から出たものであるにせよ、葡萄の樹は、全く枯れてしまう

かもしれない。すくなくとも、実を結び、生み出す力は、破壊されてしまうだろう（上 二十頁）

以上引用した箇所は、フレーベルの消極的ないし受動的教育（注 フレーベルは必ずしも積極的、能動的教育を否定しているわけではない）の説の解説となっている部分である。この消極的教育はフレーベルの思想のなかでも重要な教育原理の一つとなっている。

（１）の幼稚園は、学校教育のための予備教育であるということについてであるが、しかし、次の教育段階のためにその前の段階の教育を云々するという考え方すなわち、前の段階は次の段階のための準備であるという考え方はフレーベルの見解のなかにはなかった。フレーベルは、人間の成長過程において、各段階は互に全く区別されるものではなく一つの段階の成長の完結が次の段階の成長の前提となるという連続発展観をもっていた。

各発達段階にきわめて明確な限界を設けること、これは、自己自身の生命の発展や自己の生命の内省にはよくから注意を向け始めなかったこと、および絶えずそれに注意し続けてこなかったことに起因するのであるが、このようなことは、人類の発展や連続的な形成に、名状し難いほどの不幸、つまり人類の発展や連続的形成の阻止や破壊をもたらすのである。（上 四五頁）

少年が少年となり、青年が青年となるのは、その年令に達したからではなく、かれが、そこで、幼年期を、さらに少年期を、かれの精神や心情や身体の諸要求に忠実に従って、生き抜いてきたからである（上 四六頁～四七頁）  
このような人間の發展的段階は決して区切りのあるものではないが、人間の最初の段階である乳児・幼児の時期は、それ以後の発展の基礎であるため、特にフレーベルは重要視したのである。

この世からふたたび去るまでの人間の未来の全生活は、人生のこの時期に源泉をもっている（上 七二頁）

それゆえ、「保育篇」の著者が教育上は各段階間の密接な連絡を必要としながら、中学校や小学校の学校教育とは別の方法の教育を幼児に対してはなさなければならぬとした点は、フレーベルの幼児観に一致したものである。また、学校教育に対する予備教育の意味が、現今のいわゆる準備教育を意味するのではなく、学校教育以後の人間の発展の源という意味で人間の本質的な予備教育として用いられていたことであるならば、「創立法」の著者のいうところもフレーベル思想の解釈であるといえることができる。

次に(2)の幼稚園は、生産活動を注視するが、職業につくためではなく、身心の調和的発達を目指すことについてである。ここでみられたものの中に遊戯について触れたものがあるが、これはフレーベルの幼児教育の方法中、最も中心になるところである。フレーベルは労働や勤労をすなわち生産活動と考えており、それは人間の使命であると(注 上 四九頁～五三頁参照)遊戯との関連を見出している。

乳児の感覚器官や四肢の活動は、その(注 労働に対する人間の内からの要請)最初の芽であり、最初の身体活動は、その蓄であり、遊戯をしたり、積木を組み立てたり、形をつくってみたりする最初の形成衝動は、幼年期の最初の可愛いらしい開花なのである(上 五四頁)

遊戯することないし遊戯は、幼児の発達つまりこの時期の人間の発達の最高の段階である。(中略)遊戯は、この段階の人間の最も純粋な精神的所産であり、同時に人間の生命全体の、人間およびすべての事物のなかに潜むところの内的なものや、秘められた自然の生命の原型であり、模写である。(中略)力いっぱい、また自発的に黙々と、忍耐がよく、身体が疲れきるまで根気よく遊ぶ子どもは、また必ずや逞しい、寡黙な、忍耐がよく、他人の幸福と自分の幸福のために、献身的に尽すような人間になるであろう(上 七一頁)

フレーベルのこの遊戯に関する思想が各文献の著者たちにこのとおりに解釈されていたかどうか測ることはできな

いが、その重要性を強調した点は、フレーベル思想理解の的を得ているといえる。

また幼稚園教育が目指すものが「本性を養う」といわれていることは、フレーベルの言葉でいうならば、次のように述べられていることを意味する。

意識し、思惟し、認識する存在としての人間を刺戟し、指導して、その内的な法則を、その神的なものを、意識的に、また自己の決定をもって、純粹かつ完全に表現させるようにすること、およびそのための方法や手段を提示すること、これが人間の教育である（上 一三頁）

これまでみてきた文献に関する限り、何かある形が既につくられている目標に向けての教育が考えられているのはなかったといえる。すなわちフレーベル思想は、普遍的人間の教育の思想として受け入れられていたといえる。

（3）の幼稚園教育は、家庭教育と重複しまたは補足することについてであるが、幼稚園と家庭教育との関係についての理解は各文献ともほぼ同様であった。ただし「二十遊嬉」で稚児と学童と区別したことや、「保育篇」で人間の子どもが母親の手の内においてのみ導かれるべき時期と、幼稚園の保母の手によっても教育される時期とのけじめについて述べているのは注意深い理解である。この点についてフレーベルは次のようにいっているのである。

幼児期の段階は、主として、ただ生きるためというだけの生命の段階ないし生命それ自体の段階であり、内的なものを外に表わすことを主とする段階であるが、少年の段階は、主として、外的なものを内面化する段階すなわち学習の段階である（中略）幼児期は、主として保育の時期であった。またそれにくつ時期すなわち主として統一としてのおよび統一のための人間を要求する幼児期は、教育を主とする時期である（中略）少年期は、教授を主とする時である。（上 一二五頁―一二六頁）

ここでフレーベルは幼児期を、乳児と幼児とに更に分けていることが読みとれるが、教育を主とする時期と述べて

いる幼児期が、幼稚園教育の対象となるわけである。保育と教育の別が、家庭内のみにおいて育てられる時期と、幼稚園教育をも受ける時期との別ということなのである。ただしフレーベルが幼稚園教育を開始したのは、「人間の教育」より後れて一八四〇年であったため、同書に幼稚園に関する記述はない。ここでの論証は避けるが、筆者は、同書の幼児教育思想と、幼稚園教育とは密接な関連があると考えているので、敢て以上のような説明を試みた。

## 二、幼稚園教育の内容について

各文献とも主に「恩物 *Gabe*」を、教育の内容として扱っている。また唱歌・談話その他当時の教科とされているものについてはフレーベル思想に関する事柄を見出し難いため、本稿では、恩物または恩物についての記述にのみ限って見てゆくことにした。

「創立法」においては、その著書が関係している東京女子高等師範学校附属幼稚園において、保育課に供している恩物があるのみという実情のため、次のように述べ、恩物の名称を挙げているにすぎない。

幼稚園ニ在テ保育科目ノ高度ヲ占ムルモノニシテ自ラ幼稚ノ智力ヲ増進シ人生勉強ノ開手ト為ス可キ最上良法ナリ（二七頁）

「二十遊嬉」では、恩物を幼稚園の科目の中で最も高く評価している。

布列別氏ノ保育法タルヤ、幼稚ヲシテ遊嬉。歌唱。戯劇。体操。説話等ノ如キ各種ノ園課ニ就カシメ（中略）就中コノ二十遊嬉ハ保育科中ノ最モ高度ヲ占ルモノトス（四丁～五丁）

更にそれぞれの恩物に、それぞれの意味がこめられていると述べている。

布列別氏ノ卓然タル理學上ノ智識力ト、且ツ多年ノ實際経験トヲ以テ組成セシモノニシテ、各種ノ恩物ニ多少ノ

旨意ヲ含有セリ。而シテ其順序ノ如キモ初二最モ簡單ナル円球ヲ列ネ、漸次ニ精巧ナル技工ニ推入シ、終ニ園課ノ最モ高尚ナル粘土模型ヲ設リモノ是レ自然ノ法理ニ根拠セシ所ナリ（六丁）

各恩物の使用方法だけではなく、一つ一つの恩物を用いての遊戯によつて幼児が汲み取る内容を解説している。例えば第一恩物の球の中の二つが、太陽と地球とを表わしていることなどである。

「案内」では恩物が、フレーベルの教育方法によるものであることを次のように述べている。

恩物は二十種の物品を用ひ遊嬉に供する者にて則ち布列別氏の遺法なり布列別氏は幼稚に向て課業或は機械と称する如き鄭重なる名称を避け此一種の新教育方法を設け此物品を用ひ遊嬉歓娛の間に於て間接に智育の法を施せり（九丁）

恩物の用法の説明は「二十遊嬉」の内容の要約と思われる。

「初歩」では恩物という語については触れていない。しかし「組木」と題する章で説明されている内容は恩物の一節と非常に類似しており、「詳細は、文部省刊行の幼稚園に就て見るべし（巻一 三十丁）」とある。これは、明治九年に桑田親五訳で出された「幼稚園」を指すものと思われる。同書は、恩物の解説をなしているものであるから同書に基づいて、その内容を選択し、書き替えて述べているものと考えられる。ただしこれらの変更が、著者のどのような恩物評価からなされているかは知り得ない。

「保育篇」は、当時の恩物の用い方に批判を加えている。いわゆる恩物主義に対する初めての批判である。

近来教育ニ関スルノ書世ニ乏シカラスト雖トモ率子小学校ノ教育ニ密ニシテ幼稚園ノ保育ニ疎ナリ従ヒ専ラ幼稚園ノ保育ニ係ルモノナキニ非サルモ徒ラニ恩物ノ使用方ニ止リ深ク心理ニ由リテ其方法ヲ論シタルモノアルヲ見ス（序 五頁）



本書の著者はそこで著者自身の体験に照合し乍ら、フレーベルが恩物使用に意図したことを、考究しその用い方を解説している。第一恩物を例にとると、その目的、方法を例示している。その際すぐにその遊戯に入れない幼稚の扱いにも触れ、更に第一恩物の直接目的だけではなく、その遊戯から派生する教育効果や、他の恩物との関連や、他の目的に対する間接的效果についてまで言及している。すなわち著者は一つの恩物は他の恩物や、教育の目的とすべきあらゆる事柄と、統一的又は有機的つながりにあるということを、フレーベル思想を基にして導き出しているのである。

「フレイブル」氏ノ方案ニ係ル遊戯手業ノ全体ハ首尾聯串シテ順次ニ簡ヨリ繁ニ入レリ故ニ第二ト題スル恩物匣中第一恩物ト連続セル物ノ保有セラルルハ問ハスシテ知ルヘシ（二七頁）

諸種ノ恩物遊戯手業ノ順序聯絡ハ常ニ之ヲ記憶セサルヘカラス故ニ第二恩物ヲ用ユルノ際第一恩物ノ練習ヲ忽カセニセサルノミナラス日ニ幼稚ノ開發セル新能力ヲ使用センカ為メニ更ニ練習ノ工夫ヲ力メ而シテ此二者ト後ニ来レル恩物トノ順序聯絡ヲ固クス

例之ハ幼稚ノ成長スルニ随ヒ遠隔ノ地ニ就キテ思ヲ起シ或ハ之ヲ他日ニ記憶セルヲ見ルヘシ即チ眼前ニ於テ目撃スル能ハサル物体ト雖トモ之ヲ心中ニ描クヲ得ヘシ而ノ幼稚日常ノ散歩及ヒ臨時ノ遊行ハ其実践ニ由テ粗ホ距離ノ觀念ヲ養成スヘキナリ（三四頁～三五頁）

初めフレーベルの恩物は、幼稚園教育の内容として大きな位置を占める高度な遊具として受け入れられた。幼稚園の内容を整備する必要が大きかったことは使用方法が詳しく説明されている文献が、幼稚園創立の年に出版されていることにもその一端が伺えるが、その思想的裏付けは、実践をととして研究されたと考えられる。

「二十遊嬉」において、恩物の用い方や、直接的効果について述べられているが、その統一的解釈には至っていない。

い。「案内」「初歩」においても同様といえる。これに対して「保育篇」においてはじめて、恩物を統一的に解釈することを行なっている。このことは、フレーベルの教育思想の中心をなす「永遠の法則」の理解へとつながるものである。すなわちフレーベルが「すべてのもののなかに、永遠の法則が、宿り、働き、かつ支配している（上 一一頁）」と言っていることに対しての間接的アプローチである。そして更に次のことの解釈へもつながるといえるよう。

意識し、思惟し、認識する存在としての人間を刺戟し指導して、その内的な法則を、その神的なものを、意識的に、また自己の決定をもって、純粹かつ完全に表現させるようにすること、およびそのための方法や手段を提示すること、これが、人間の教育である（上 一三頁）

人間を取りまいて自然に内在し、自然の本質を形成し、自然のなかにつねに変わることなく現われている神的なもの、精神的なもの、永遠なものを、教育や教授は、人々の直観にもたらし、人々に認識させるべきであり、またそうしなければならない。教育や教授はまた、教訓と互に活発に作用し合ったり、結合したりして、自然と人間との間に同一の法則が支配していることを明らかにし、表現すべきであり、またとうぜんそうでなければならぬ（上 一五頁）

右の引用から読みとれるフレーベルの永遠の法則と、教育の義務についての認識を、「保育篇」の著者がそのとおりに理解していたとは決していえないが、恩物による教育実践の中から、フレーベルの教育思想の中心の理解へと近づいていたということがいえると考ええる。

## 結 び

序において既に述べたように、明治初期においてフレーベル思想は、教育思想そのものとしてではなく、幼稚園の

実践の中に、あるいはそれをおして受容されたことは、本稿においても十分いえることである。

ところで、これまでみてきたところから、フレーベルの思想受容について次のような特徴が見出せるのではないかと思う。

その一は各文献の著者がフレーベルの著書には直接触れていないことである。「創立法」には、幼稚園やフレーベルに関する英文の文献について、それらのタイトルと著者と定価とが紹介されているが、いずれもフレーベルの著書ではない。幼稚園という教育機関あるいは教育方法の導入先は、当時の翻訳論文などから推察する限りでは米国と考えられること、また導入を速やかに図るためには、思想の原典をみるよりも、実践に関係したことの紹介をみる方が容易であったためではないかと思われる。

その二はフレーベル教育思想は、体系的に理解されなかったことである。フレーベルの教育思想の根底をなす宇宙観、宗教観、人間観についての理解、そしてそこから導き出されてくるものとしての教育原理とその方法についての理解は全くなかったといえる。フレーベルの幼稚園教育は、かれの晩年に実現されていることであり、上記のことについての理解なしに幼稚園教育の真の理解もありえないと考えられるが、これまでみてきたところでは、幼稚園ないし幼児教育に限っての理解であった。教育目標としての人間像についての明確なものが示されておらず、単に幼児の調和的教育を目指すことに留まっていることは、フレーベル思想の理解が中途半端なものであることを物語っている。幼稚園の導入に伴っての、教育思想理解であることゆえのすなわち思想としての原理でなく、実践のための原理の導入であるゆえの当然の限界ではある。

その三は、恩物が、フレーベル思想の理解に大きな役割を果たしたことである。文献でみると、幼稚園と問えばすぐに恩物の使用と答えが返えるような状況ではなかったろうか。ごく初期の文献には、恩物の使用方法についての解

説のみがされており、その背景にある思想に触れることはほとんど無かった。しかし「保育篇」にみられるように、恩物が目的とするものへの考察が実践をおしてなされ、フレーベルの教育思想の理解へと進出した。その理解は断片的でありまた初歩的なものではあったが、フレーベル思想の核心の理解へとつながるものであった。

相互に関係し合うものではあるが、以上の三点が、明治初期におけるフレーベル教育思想受容の特徴といえる。フレーベルの教育思想についての理解は未だ全体的把握はなされておらないが、幼稚園教育の実践と直接関係する点においては、その概要が著しく誤ることなくとらえられていた。またフレーベル教育思想に対しての偏見ないしは、偏向的受容の可能性は見当らないといえる。

なお各文献の引用文のなかに幼児、幼稚、稚児など用語の不統一や、それらの用語の意味する年令の範囲が明示されていない場合が多いなど、厳密に言えば問題がある。しかしこれらのことは心理学を含む幼児教育の発達との関連のなかで検討するのが適当であると考へ本稿では取上げるのを避けた。